

NANA MAGARI

七曲古墳群

— 5・6号墳の調査 —



遺跡名	遺跡略号	調査番号
七曲古墳群 第1次	NNMK-1	1019

2012

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が生まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えていきます。

本書は平成22年に行いました、七曲古墳群第1次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において様々なご協力をいただきました、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

—例言—

- ・本書は福岡市教育委員会が、2010年8月9日から10月28日にかけて実施した七曲（ななまがり）古墳群第1次調査（博多区大字立花寺字白石28番）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書における方位は磁北である。
- ・本書の作成は藏富士がおこなった。
- ・玉類の分析は埋蔵文化財センター西澤千絵里氏による。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目 次

はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
I 位置と環境	2
II 6号墳の調査	4
1 古墳の現況および立地	4
2 墳丘	5
3 主体部	8
4 出土遺物	13
III 5号墳の調査	16
1 古墳の現況および立地	16
2 墳丘	16
3 主体部	18
おわりに	19

挿 図・表 目 次

図1 七曲古墳群 (1/2,000) …………… 2	図10 6号墳石室内出土遺物 (1/2・1/3) …… 14
図2 周辺の遺跡 (1/5,000) …………… 3	図11 6号墳墳丘出土遺物 (1/3・1/4) …… 15
図3 現況測量 (1/300) …………… 4	図12 6号墳周溝2出土遺物 (1/3) …… 15
図4 墳丘遺存状況 (1/300) …………… 5	図13 5号墳土層 (1/80) …………… 16
図5 6号墳土層 (1/80) …………… 7	図14 周溝 (1/40) …………… 17
図6 6号墳墳丘遺物出土状況 (1/30) …… 8	図15 5号墳遺物出土状況 (1/4・1/20) …… 17
図7 6号墳主体部 (1/50) …………… 9	図16 5号墳主体部 (1/40) …………… 18
図8 閉塞 (1/40) …………… 11	図17 閉塞 (1/40) …………… 19
図9 6号墳石室内遺物出土状況 (1/3・1/4・1/40) …12	図18 5号墳墳丘出土遺物 (1/2・1/3) …… 19
表1 ガラス玉計測値 …………… 13	

図 版 目 次

図版1 1 遠景 (南から)	2 6号墳遠景 (南東から)
3 近景 (北西から)	4 5・6号墳墳丘 (北西から)
5 6号墳墳丘 (西から)	6 周溝2 (南から)
図版2 1 6号墳墳丘 (南から)	2 6号墳墳丘遺物出土状況 (南東から)
3 5号墳墳丘 (西から)	4 5号墳墳丘遺物出土状況 (南西から)
5 5・6号墳墳裾 (南から)	6 5号墳周溝 (南から)
図版3 1 6号墳主体部閉塞1 (南西から)	2 6号墳主体部閉塞2 (南から)
3 6号墳主体部閉塞3 (西から)	4 6号墳主体部閉塞4 (西から)
5 6号墳主体部閉塞5 (北東から)	6 6号墳主体部閉塞6 (北から)
図版4 1 6号墳主体部俯瞰 (南西から)	2 6号墳石室入口 (南西から)
3 6号墳左前庭部側壁 (南から)	4 6号墳右前庭部側壁 (西から)
5 6号墳玄室奥壁 (南西から)	6 6号墳玄室入口 (北東から)
図版5 1 6号墳玄室奥壁左隅 (南から)	2 6号墳玄室奥壁右隅 (西から)
3 6号墳玄室右側壁 (北東から)	4 6号墳玄室左袖部 (西から)
5 6号墳玄室内遺物出土状況 (南東から)	6 6号墳玄室床面 (北東から)
図版6 1 5号墳石室左袖部 (東から)	2 5号墳石室全景 (北東から)
3 5号墳前庭部左側壁 (南から)	4 5号墳玄室左側壁 (東から)
5 5号墳閉塞 (南西から)	6 5号墳閉塞 (北東から)
図版7 1 6号墳墓道断面 (南から)	2 6号墳墓道 (南西から)
3 6号墳墓道上墳丘断面 (北東から)	4 6号墳墳丘断面1 (南西から)
5 6号墳墳丘断面 (南から)	6 6号墳地山面被熱痕跡 (南東から)
図版8 出土遺物	

はじめに

1 調査に至る経緯

平成23年6月10日、博多区大字立花寺字白石28番において、丘陵部を最大27m切り下げる防災工事が計画され、埋蔵文化財第1課に対し埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は周知の埋蔵文化財包蔵地内（七曲古墳群）であることから、実際に踏査を行い、工事予定地内に5・6号墳が存在することを再確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。埋蔵文化財第2課による発掘調査は平成22年8月9日に開始し、同年10月28日に作業を終了した。調査にあたっては、社会福祉法人静都の皆様をはじめとする関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

(1) 平成22年度（調査）

事前審査	埋蔵文化財第1課	課長	濱石哲也
		事前審査係長	宮井善朗
		主任文化財主事	加藤良彦
		事前審査係	木下博文
総括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛

(2) 平成23年度（整理・報告）

総括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛
整理作業	大石加代子 萩本恵子		

遺跡調査番号	1019		遺跡略号		NNMK-1
地番	博多区大字立花寺字白石28番		分布地図記号		金隈11
開発面積	3,719㎡	調査対象面積	800㎡	調査面積	420㎡
調査期間	2010.8.9~2010.10.28				

I 位置と環境

福岡平野の東端に位置する月隈丘陵は、北西方向にのびる狭長な丘陵であり、西側に御笠川、東側に宇美川が流れる。月隈丘陵からは、御笠川に向かって、多くの小丘陵が派生しており、七曲古墳群もその内の一つに立地する。月隈丘陵帯には数多くの古墳が営まれている。古墳時代後・終末期に限っても、持田ヶ浦古墳群、観音浦古墳群といった大規模な古墳群が形成されている。特に持田ヶ浦・堤ヶ浦古墳群は福岡市域においても、有数の規模を誇る。

七曲古墳群は、これまで6基の存在が知られているが、今回の踏査で新たに2基の存在を確認し（7・8号墳）、計8基の古墳群となった。ところで、先にも述べたように、当古墳群は志免町側では「桜ヶ丘古墳群」に含まれている（徳永編1999）。桜ヶ丘古墳群は計13基の古墳群とされ、今回報告の6号墳は桜ヶ丘第12号墳、5号墳は第13号墳となる。このように現在の行政上の境によって、古墳群の把握方法や古墳そのものの認定も異なっており、将来的には情報や名称の共有化、統一化が必要だろう。

文献

徳永博文編1999『市内遺跡分布調査報告書』志免町文化財調査報告書 第9集 志免町教育委員会



図1 七曲古墳群 (1/2,000)

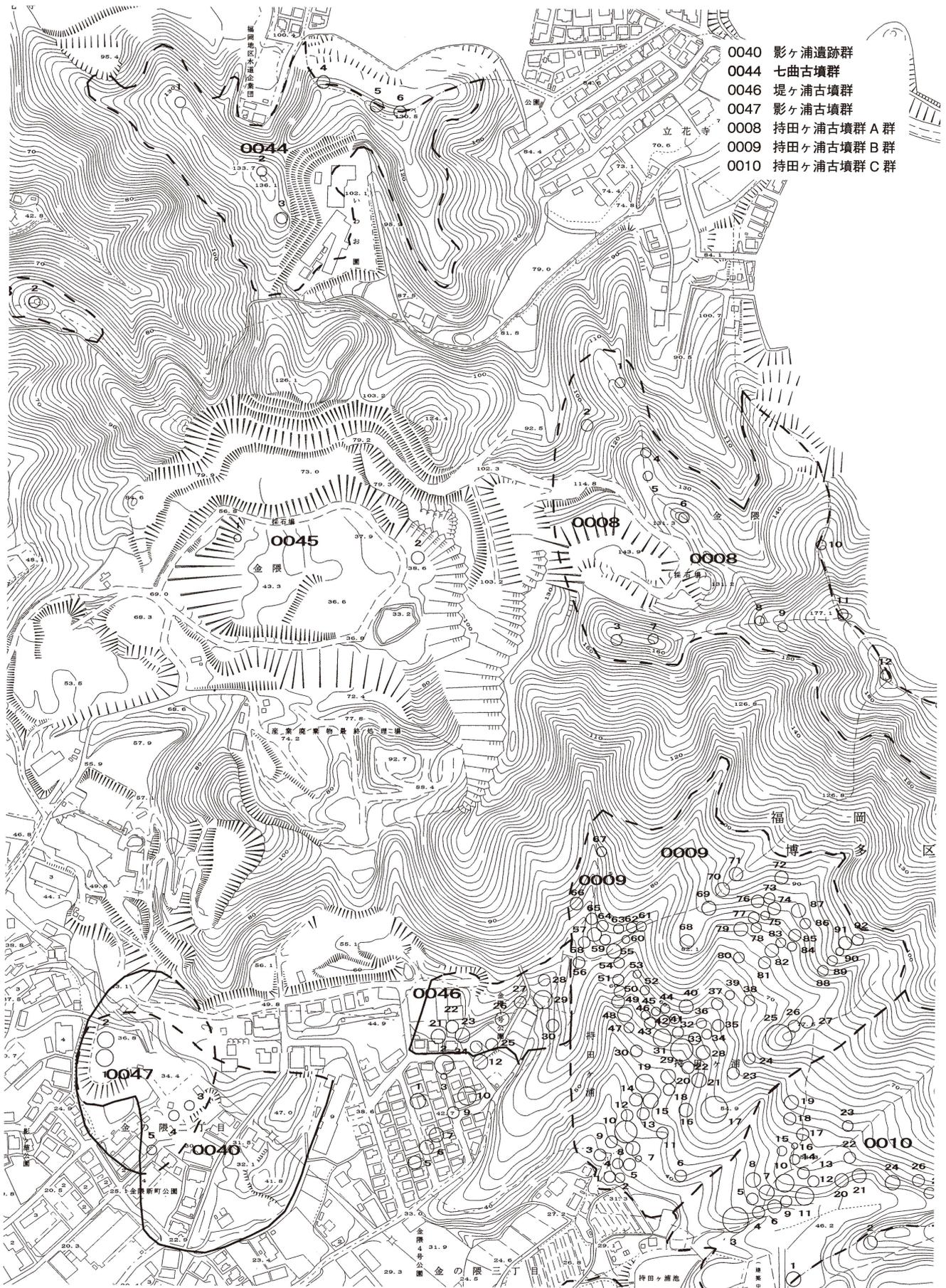


図2 周辺の遺跡(1/5,000)

II 6号墳の調査

1 古墳の現況および立地

6号墳は七曲古墳群が存在する丘陵北側の頂部に立地し（図2）、北西側には近接して5号墳が存在する（図3）。これら古墳の存在する丘陵北側は、宅地の造成によりすでに大きく削り取られて崖状をなしており、その影響は6号墳墳丘の一部にも及んでいた。調査前の大雨の際には、一部が崖崩れを起こしており、地盤の不安定さは調査を遂行する上での懸念材料ともなった。また、丘陵の南側も開発行為により多くが削り取られ、急峻な斜面となっており、6号墳の周辺は丘陵尾根筋をか細く残すのみとなっている。

しかし、6号墳自体の遺存状況は良好で、樹木の鬱蒼とした調査前の踏査の際にも、径20m近い墳丘ははっきりと確認できた。特に、墳丘東側の裾部より広がる平坦面は、古墳造築の際の入念な造作を想起させた。墳丘頂部には、盗掘等による陥没孔があり、主体部が横穴式石室であることは容易に予想できた。ただ、盗掘孔の形態から、開口方向が南西側にあることは分かっても、入口の位置を窺うことのできる痕跡はなく、この主体部が、無羨道の石室なのか、それとも墳丘の残りが良いため単に羨道石材が露出していないだけなのか、その判断がつかかぬた。また、墳丘の周囲には巨木が生い茂り、夏期の、当然人力を主体とする発掘調査が、大いに難渋するであろうことは、着手前から十分予想された。

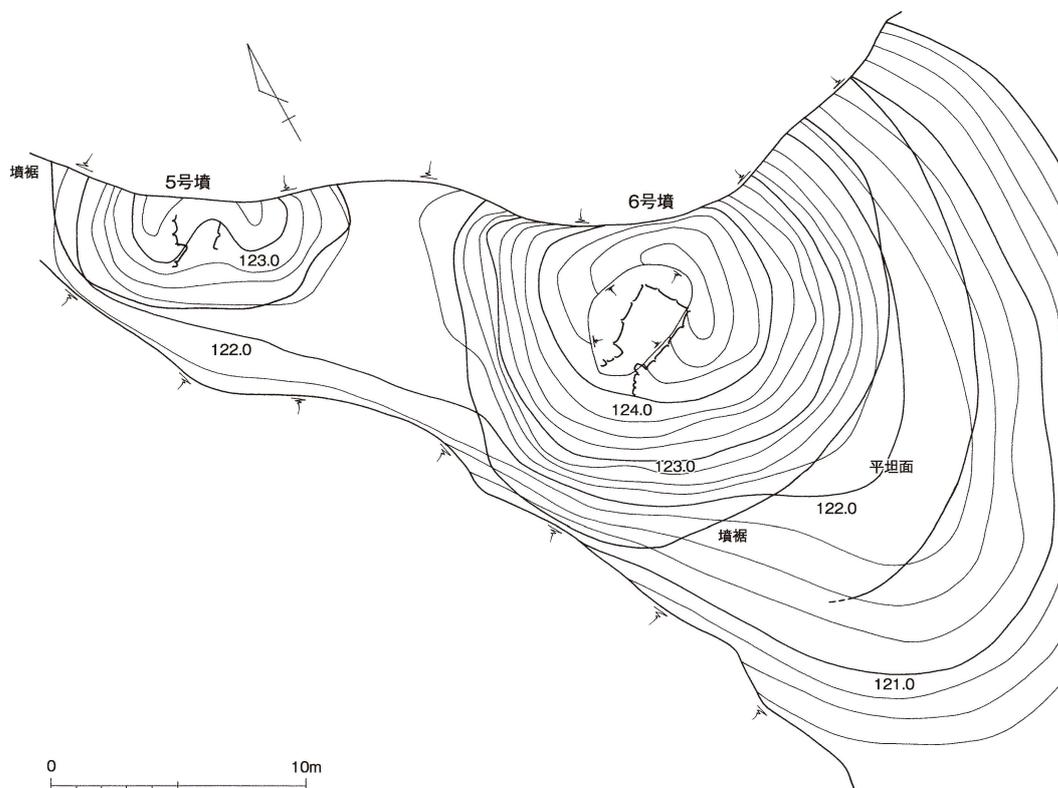


図3 現況測量 (1/300)

2 墳丘

(1) 現況

北側の一部を削り取られている以外、墳丘の遺存状況は良好であった。周辺樹木の伐採の後、平板測量をおこなった。等高線は25cm間隔で作図している（図3）。また、墳裾間で0.5m程離れた北西側に5号墳があり、6号墳との密接な関係が窺うことができる。6号墳裾部の東西側では、人為的に平坦面が造り出しており、東側のそれは幅0.2~0.5mの幅を持つ。現況では周溝や墓道などの痕跡は認められなかった。

先にも述べたように、6号墳の調査にあたって、2つの問題点があった。一つは古墳北側の崖面で、崩落の危険があり、崖下の至近に民家がある以上、崖面近くの調査は断念せざるを得なかった。そして二つ目は、墳丘周囲に生えている樫などの巨木で、限られた期間と予算の中、しかも酷暑の炎天下で作業を行う関係上、これを人力で取り除き、その下を調査することは不可能であると判断した。従って、変則的な位置にトレンチを設定し、土層を観察（図5）した後に、墳丘およびその周辺の表土の除去をおこなった。

その結果を示したのが、図4である。墳裾東側では、裾部に幅1~2m程度のごく浅い溝が巡っている。これを周溝1と呼ぼう。一方、墳裾西側では、巨木が存在するため未掘部分も多く、詳細は不明だが、一部墳裾を巡り、墳丘外（南西方向）へと伸びる浅い溝を確認できた。これを周溝2と呼ぼう。「周溝」という言葉を使用してはいるが、これらは溝というよりも凹部と称すべき程度のもので、視覚的にも墳丘とそれを峻別する、いわゆる周溝とは明確に異なっている。これは丘陵の頂部にあるという立地とも無関係ではない。ところで、周溝2からは多数の遺物が出土しており、墓道としての機能を有していた可能性がある。また、周溝の巡っていない場所でも、丘陵造成の影響が及ぶ墳丘南西側（石室入口付近）以外の場所では、墳裾（傾斜変換線）は比較的是っきりとしており、その確認は容易であった。以上の観察より、6号墳は径18mの円墳であると判断する。現況の墳高は3mを測る。段築や葺石・列石といった外表施設は認められない。

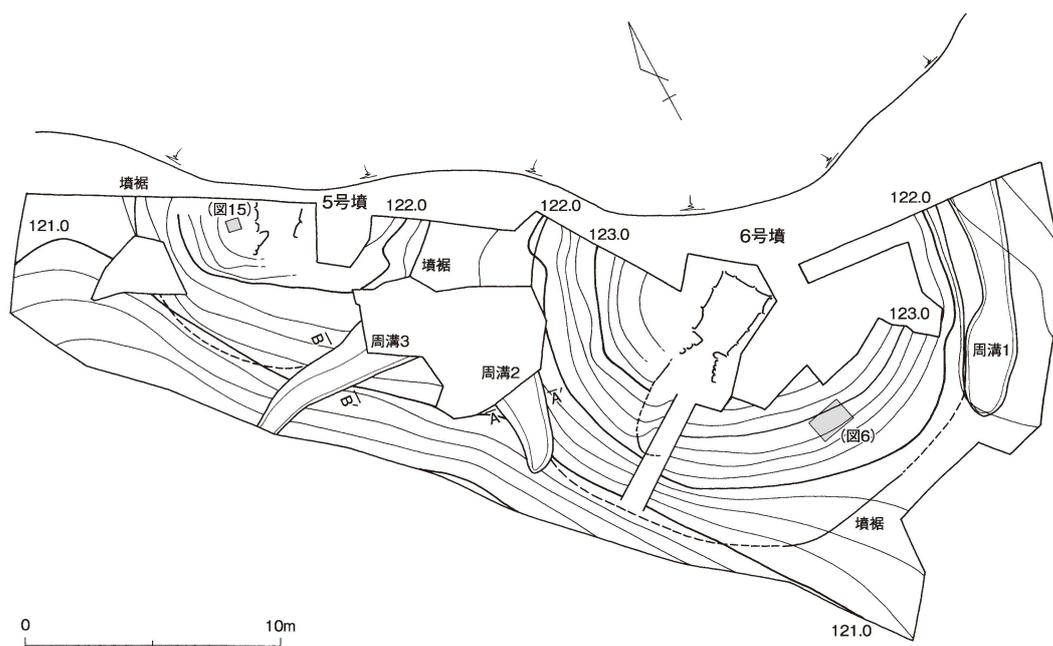


図4 墳丘遺存状況 (1/300)

(2) 土層

ここでは、各墳丘土層図の所見について記す。各土層については、表現に若干の違いがある。A-B断面、E-I断面、L-M断面に関しては、通常通りの分層を行っているが、C-D断面、J-C断面については、理解を容易にするため、細かな単位の細分は行わず、大きな単位ごとの把握にとどめている。

A-B断面

墳丘の北西側に設定したトレンチの土層で、主体部である横穴式石室の墓坑や裏込めを確認したのは、この断面のみである。途中に大きな木根があり、未掘の部分がある。まず、標高123m付近で地山を平坦に仕上げ、墳丘の裾部を削り出し、墓坑を掘削する。墓坑の深さは90cm程である。裾部より先は平坦な地山面が続き、周溝は認められない。その後、横穴式石室構築と並行して、裏込めの充填を行い、地山の平坦部に、墳丘の盛土を行っていく。盛土部分では、a-a'線を境にして上下に二分できる。下方(1工程)は薄く緻密に盛土を行っているのに対し、上方(2工程)は大きめの単位でしか層の把握ができなくなる。また1工程も途中の黒色土層で、上下2つの小工程に区分可能だろう。

C-D断面

墳丘の南東側に設定したトレンチの土層で、A-B断面と同じく地山を平坦に仕上げ、墳丘の裾部を削り出している。地山の平坦面はA-B断面より、わずかに低く、そのためか、地山の上面には地山質の土を薄く盛っている。また、この表面には黒褐色土(旧表土)が確認できる。墳裾部分にはわずかな凹部があり、周溝状の浅い溝が存在していたことが確認できた。墳丘盛土部分には2つの黒色土層がある。上は1・2工程の境に、下は1工程途中の小工程の境にそれぞれ相当するだろう。

E-I断面

前庭部から墳丘南西側の土層である。L-M断面が墓道の土層であるのに対し、G-I断面に墓道はかかっていない。複雑かつ緻密な盛土がなされていることが分かる。まず、地山を平坦に仕上げ、墳丘裾部を削りだしていることは他と同じだが、その平坦面は他よりも50cm程度低く、そのため薄く堅固な盛土を行い(c-c'線)、他と同じ標高123m付近までの嵩上げを行っている。

E-I断面は短い土層図の連続であり、しかも盛土も緻密で小単位が連続していることから、他の土層の様に、大きな工程の把握が難しい。ただ、F-G断面に表れた凹部(a-a'線)、G-H断面に表れた凸部(a-b-b'線)の存在は注目しておきたい。これは墳丘構築中に土手を作り、その中を充填することで盛土を行うその痕跡が表れたものと解釈したい。

J-C断面

墳丘南側で、木根を残して墳丘の断ち割りを行った際、壁面に表れた土層である。当初は記録を取ることを想定していなかった。C-D断面に表れた黒色土が続き、F-H断面に表れた土手状盛土も確認できた。この断面を記録するに至ったのは、地山上、旧表土下に被熱痕を2カ所確認したためである。焼土が明確に認識でき、周囲には炭化物も散らばっていた。地山整形した後の地山面に存在するため、この焼土が他の時代、つまり古墳時代以前のものである可能性は低い。これには、地山整形の後、何らかの祭祀行為がこの場所で行われた可能性を指摘できるだろう。

L-M断面

3章(2)閉塞の文中にてその所見を述べる。

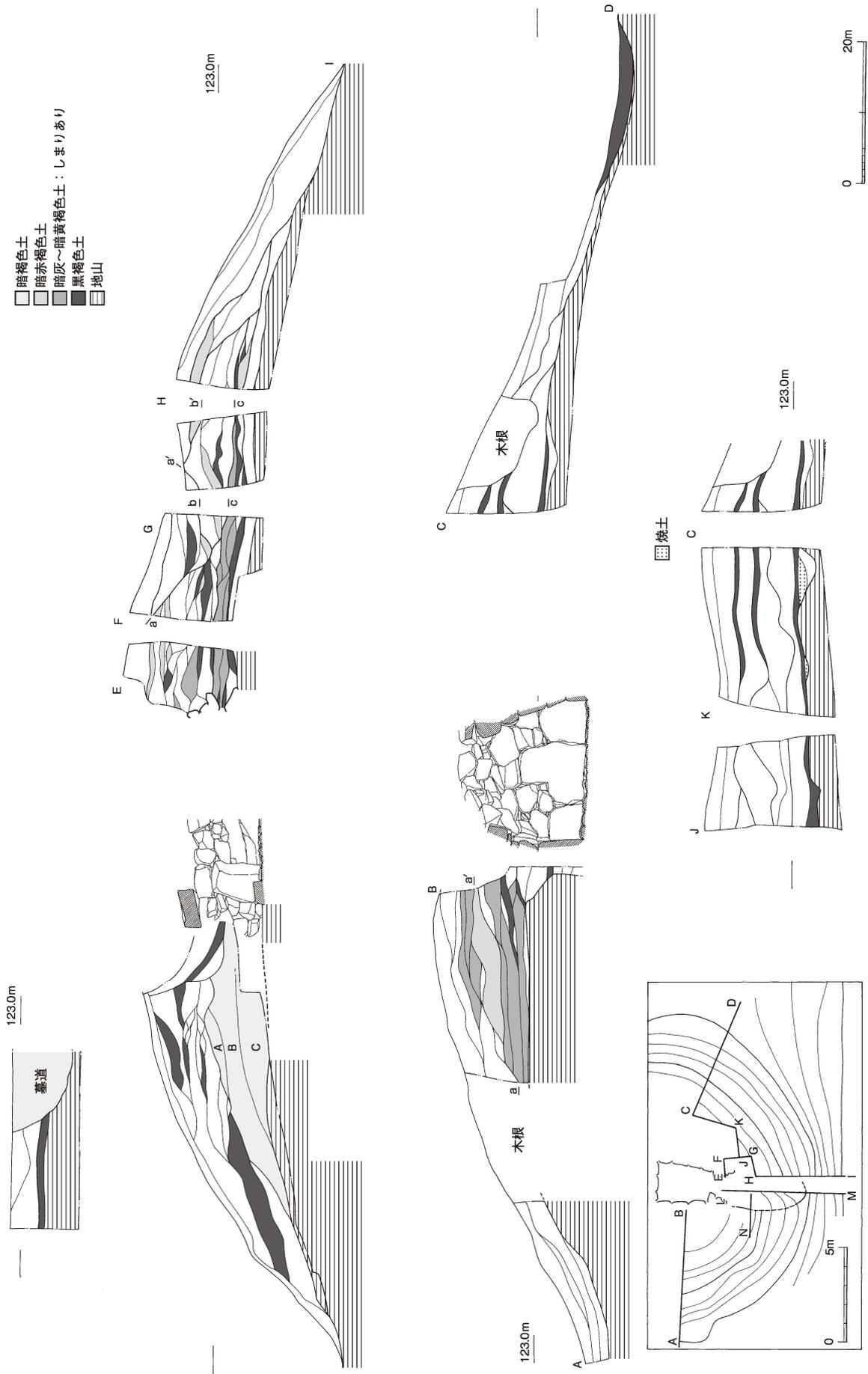


図5 6号墳土層 (1/80)

(3) 遺物出土状況

墳丘のトレンチ調査をおこなった際、図4に示す地点で、須恵器蓋杯、甕のまとまった出土をみた(図6)。いずれも地山の直上に存在しており、その上の盛土は薄く、これら遺物が埋置されていたのかどうか、判断はつかなかった。ただ、各個体とも比較的まとまって出土しており、たとえ原位置ではないにしても、その存在や出土地点にある程度の有意性をみることは許されよう。

個体は大きく3つに分かれている。1グループ(図11-8)は須恵器の甕の破片により構成される。いずれも胴部片で、全形を窺うことのできるだけの個体は無く、口縁部や底部の破片も含まれていない。2グループ(図11-1・2)は須恵器蓋杯によるものである。いずれの資料も破碎されている。蓋1、杯1という当然の組み合わせであるが、セット関係とみるには口径の差が大きい。3グループ(図11-3~5)は1グループと同じく、須恵器蓋杯により成り立っている。蓋1、杯2という組み合わせで、これら資料も大きさに違いがある。また、このトレンチ調査では、他に蓋杯が1セット出土している(図11-6・7)。法量や形態、焼成など共通点が多く、セット関係であった可能性がある。

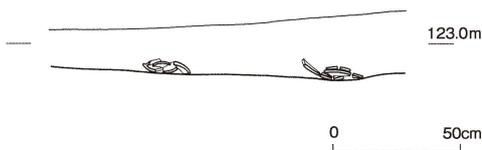
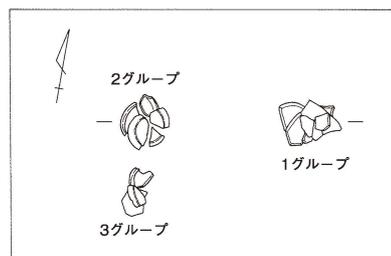


図6 6号墳墳丘遺物出土状況(1/30)

3 主体部

(1) 横穴式石室

先にも述べたように、6号墳の主体部は横穴式石室である。石材の多くは花崗岩による。開口は南西方向(S-62°-W)である。後世の破壊により天井部を失っており、現況では床面より1.8mまでの各壁体が残る。石室の形態は、重藤輝行氏のいう単室無羨道石室で(重藤1999)、入口に羨道はなく、「ハ」字に開く前庭部が付く。

玄室は長さ2.8m、幅1.5~2.1mを測り、奥壁側がやや幅広の平面台形を呈している。側壁はふくらみを持たず、直線的である。各壁面の面取りは比較的良くなされており、平滑で精美な印象を受ける。奥壁・側壁の基底部には比較的大形の石材を据える。奥壁・左側壁には3石、右側壁には4石を使用する。基底石は塊石というより、板状に近い石材を使用しているのだが、奥壁、そして奥壁側側壁の基底石は縦位に、前壁寄りの側壁は横位に立てて使用しており、前者に比して、後者は1/2程の高さしかない。奥壁側の3石の内、中央の石材は基底石の中で最も大きく、床面よりの高さは0.9m程を測る。またこの石材は、左上の隅部が鍵状を呈していることは注意しなければならない。奥壁の基底石は意図して凸形に仕上げていることが分かる。ところで玄室各基底石の高さは、①側壁前側の石材：20~30cm、②奥壁左右・側壁奥側の石材：50~60cm、③奥壁中央の石材：90cmとなっている。先にも述べたように、①の高さは②の半分ほどで、また②の高さは玄門袖部の立石の高さや③の鍵状加工部の低面と等しい。また、③の上面は楣石の下面と高さが等しくなっており、一定の設計企画を持って、この石室が構築されていることが分かる。

基底石より上の側壁石材は塊石を主として横位に使用する。横目地がよく通っており、奥壁寄りには比較的大形の石材を使用している。これには、重要である奥壁側を立派に仕上げるといふ観念上の要素、前側に比べて幅広になり構造的に弱い奥壁側を強固にするという構造上の要素、という

2点を考えることができるだろう。これに比べて奥壁側の石積みはやや異なり、左隅の石積が前方へせり出し、壁体には右上方から左下方への斜め目地が走っているようにもみえる。特に6世紀末葉以降を中心に、福岡市域の横穴式石室では、奥壁左右の抹角処理の高さがアンバランスとなり、このように片隅の石材が迫り出してくるようになる事例も増加するが、この石室の場合、左右等しく基底石から2石上の石材で抹角処理を行っており、これら事例とは基本的に大きく異なる。担当者は、鍵状部分より上方にのびる縦方向の目地に注目しており、ちょうどこの部分で、右側壁側からかかる石材の加重を処理している（受け止めている）ように思える。玄室奥壁側の左隅部の石積にのみ精美さを欠き、若干の乱れが生じているのはこのためであろう。

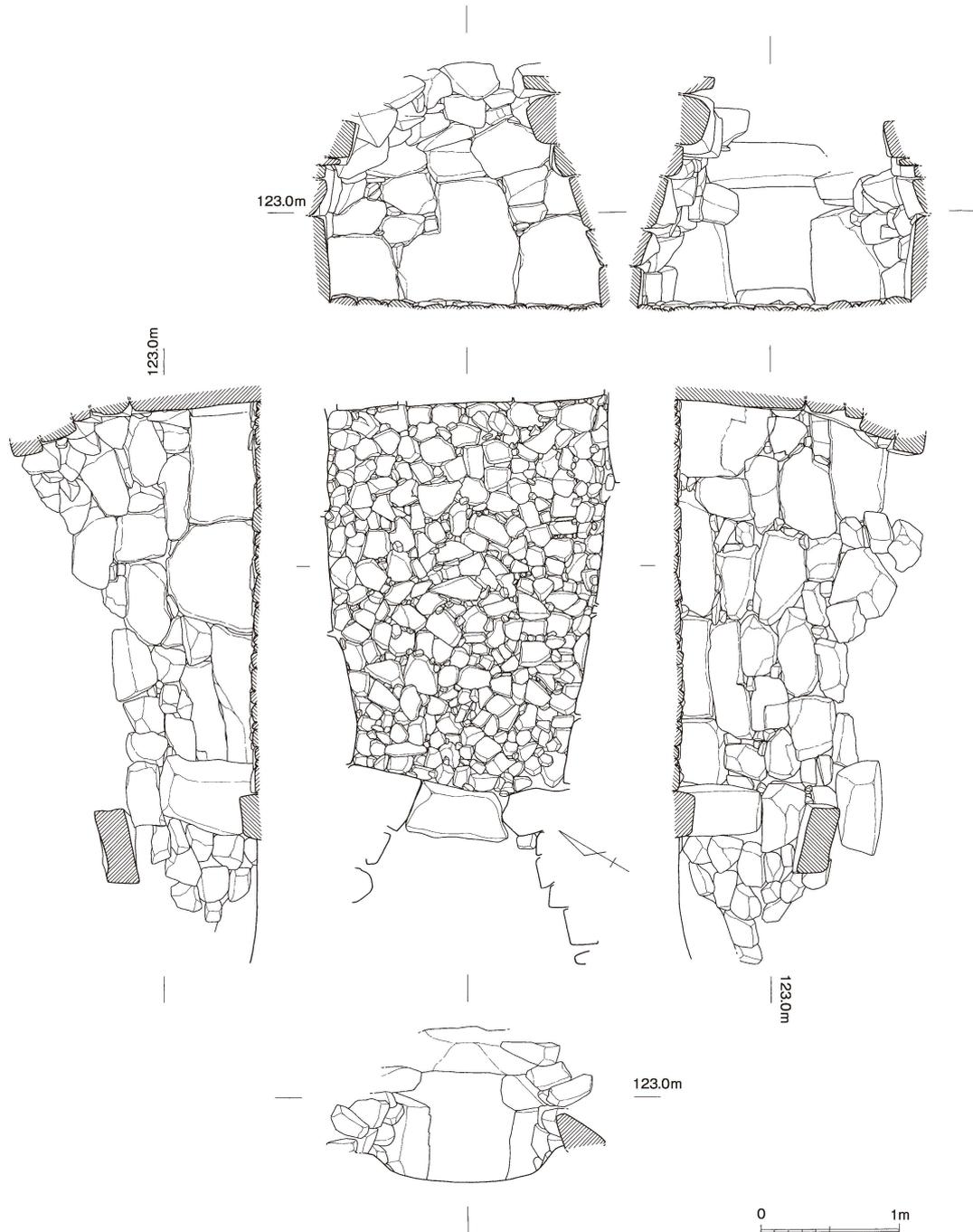


図7 6号墳主体部 (1/50)

横穴式石室の壁体は、奥壁や左右側壁、袖石・前壁がそれぞれ独立して存在しているのではなく、互いに関連しあって存在していることはいうまでもない。それぞれを個別の「属性」として認識するのではなく、総合的な視点で分析を行うことが望まれる。

玄室床には、一面に敷石を施す。削りだした地山の直上に敷いており、平滑な石材を配し、その隙間に小石を充填する。敷石は1面のみであり、玄室内出土遺物の内、玉類はこの直上より出土した。床面は平滑に、そして丁寧に仕上げられている。敷石の実測をしている際に感じたのであるが、玄室手前の左隅から奥側の右隅を結ぶ斜線を想定し、玄室床面を二分（左奥側と右手前側）すると、前者の床面には比較的大きな石を配しているのに対し、後者には小ぶりの石が多くなっている傾向があるように思えてならない。これは些細な違いであるが、後述する石室使用のあり方を考え合わせると興味深い。

袖石は立石による。板状（柱状に近い）の石材を石室主軸の直交方向に向けて立て、その上に1段の石積を行い、楣石を掛ける。袖石の間には敷居石を配する。袖部の長さは左袖50cm、右袖40cmを測り、入口はわずかではあるが、右側へ寄っている。左袖石の厚さは35cm、右袖石の厚さは30cm、敷居石の幅は35cmをそれぞれ測る。入口の幅は50～60cm、高さは70～80cmである。

前庭部では袖石より外側に長さ70～90cm程の石積が施される。前庭部の底面は「U」字形をなし、地山を削って通路が造り出されている。石積の外側は地山を削り貫いただけの素掘の墓道が続く。図7にはわずかに立ち上がる前庭部底面を表現しているが、これは部分的なもので、墓道部分の地山の高さを考えれば、前庭部－墓道の床面はほぼ平坦に続いていたとみた方が良いようだ。前庭部の石積は乱雑で、小形の石材ばかりである。石積みの底面は次第に高くなっているが、これは石室築造時の地山整形の際、墓坑の掘り込みを行っており、その立ち上がり部分にのみ、石材を配しているためである。ところで、袖石の端面と前庭壁体は一続きになっており、前庭壁体からみれば袖石は全く突出していないことを強調しておきたい。

文献

重藤輝行1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

（2）閉塞

6号墳の主体部である横穴式石室入口部分の閉塞は、玄門部で板石によって行われている。閉塞石は花崗岩で、高さ60cm、幅70cm、厚さ40～70cmを測る。垂直に立てれば、入口をほぼふさぐことができるが、検出時はやや内側へ倒れ込んでおり、楣石と閉塞石との間には十数cmの隙間が生じていた。閉塞石は、敷居石・左右袖石に接して板石を立てかけ、底面に1石、左右の壁体との間に各1石をそれぞれかませ、固定する。敷居石の上、つまり石室の内側に閉塞石に沿って、塊石が1つ置かれているが、これが閉塞石の固定に役立つとは思えない。その意図は不明である。ところで、閉塞石の外側には、塊石等の積み上げはなく、ただ土砂が充填してあるのみである。前庭部や墓道の埋土をみても閉塞に伴うと考えられる石材は全く出土しておらず、もともと閉塞に塊石の使用は無かったものと考えたい。

次に墓道の土層観察から、閉塞のあり方について、述べていくことにする（図5；L-M,N断面）。L-M断面をみれば、墓道部分の土層は大きく三つ；①閉塞石を埋め立てているA～C層、②黒色土の間層をいくつも挟んだ①の上部に堆積する層群、③石室入口上方からの掘り込み内の堆積土、に分けることができる。③層は、①・②層に比して土にやや締まりが無く、時期的に新しいものである可能性もあり、以下に述べる考察の対象から除外しておく。①層はN断面に表れている墓道を

充填するもので、主として地山を由来とする暗赤褐色土である。各層の違いは小さく、当然黒色土の間層も含まない。これらの点は②層とは大きく異なるもので、層の途中に追葬その他による使用面も確認できず、むしろ墓道は一気に埋め立てられたかのように見える。①層はそのまま閉塞石まで続いており、①層には閉塞石を動かした痕跡は認められなかった。先に述べたように、閉塞石は入口をほぼ塞いでおり、閉塞石を動かさない限り、石室内への出入りは不可能である。この担当者による調査所見が事実であれば、石室内使用の際には地山を削り貫いた墓道部分を使用し、終了後は墓道を埋め立て（①層）、その後は一切石室内には立ち入らなかったことになる。従って、②層中の黒色土を使用痕跡とみなすのであれば、これらは石室内部に進入する必要がある追葬などではなく、例えば墓前祭祀等の痕跡であると考えられるべきであろう。ところで、石室入口に設定したトレンチからは遺物の出土は無く、墓前祭祀等の存在を積極的に裏付ける根拠はない。担当者は、むしろ②層を墳丘盛土と見なすべきではないかと考えている。黒色土が幾重にも重なる部分は、墳丘土層F-H断面にみるような、土手状の盛土部分に相当するのではないか。そうであるならば、最終使用の後、墓道を埋め、更にその上に盛土を施し、入口自体を完全に消してしまったことになるだろう。

(3) 遺物出土状況

6号墳は大形の部類に入る古墳であることから、調査着手前、担当者は主体部内から、かなりの副葬品が出土することを予想していた。しかし、その結果は予想を大きく裏切るもので、内部からの遺物出土は本当に少なかった。床面近くの排土はふるいをかけ、遺物の検出に努めている。それでも、床面精査中に出土した遺物は、床面直上に原位置で残された玉類、そして破片散布された須恵器壺で、残りはふるいで確認した鉄器の小片3点のみである（図10）。この「少なさ」がこの古墳を特徴づける要素となっているといえるだろう。

床面直上で確認した遺物は、大きく次の3群に分けることができる（図9）。

- 1群；玄室奥壁側にある管玉群
- 2群；玄室左側壁側にある勾玉・ガラス玉群
- 3群；玄室右側壁前側を中心に分布する須恵器片

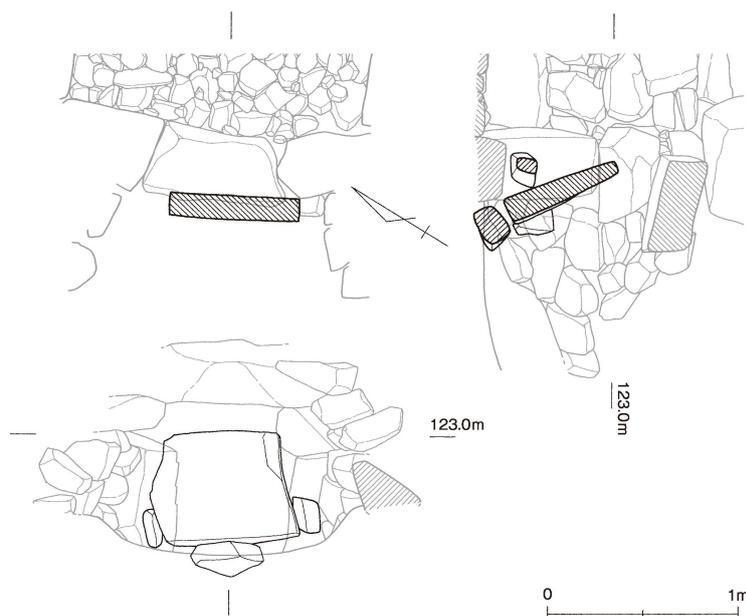


図8 閉塞 (1/40)

1群は奥壁右隅近くで検出した4個の管玉よりなる（1～4）。4のみが離れた場所に存在する。また、1～3の管玉近くには床面に赤色顔料が残っていた。これら事実から、玄室奥壁側に沿って、頭位を南側に向ける被葬者の存在が想定できる。2群は玄室左袖部付近で確認した勾玉・ガラス玉よりなる（5～34）。この勾玉・ガラス玉群の近くでも、床面上に赤色顔料が確認できた。よって、玄室左側壁に沿って頭位を入口側に向ける被葬者の存在が想定できる。3群は散布された須恵器壺の破片である。壺はかなり細かく破碎されており、結局個体を完全に復元するだけの破片は採集していない。1・2群の玉類とは異なり、全てが床面直上の資料ではなく、床面より浮いた状態で確認された資料も多い。分布の中心が、遺体の安置する奥壁側や左側壁側ではないことには注目する必要がある。

ところで、先に玄室床面の敷石について述べた際、左奥側と右手前側とでは、若干そのあり方が異なっていることを指摘した。この遺物の出土位置から想定した被葬者配置からみると、前者、つまり床面には比較的大きな石を配している部分に、被葬者を安置していることが分かる。多分に感覚的な、些細な違いを極端に強調している可能性をおそれるが、本来このような石室構築段階から存在する遺体配置や祭祀等、石室内空間の使用に関する計画性は、屍床配置など九州地域の横穴式石室では顕著に認められるものである。とりあえずここでは、石室床面の敷石のあり方にも、このような「計画性」が表れる可能性があることだけでも指摘しておきたい。

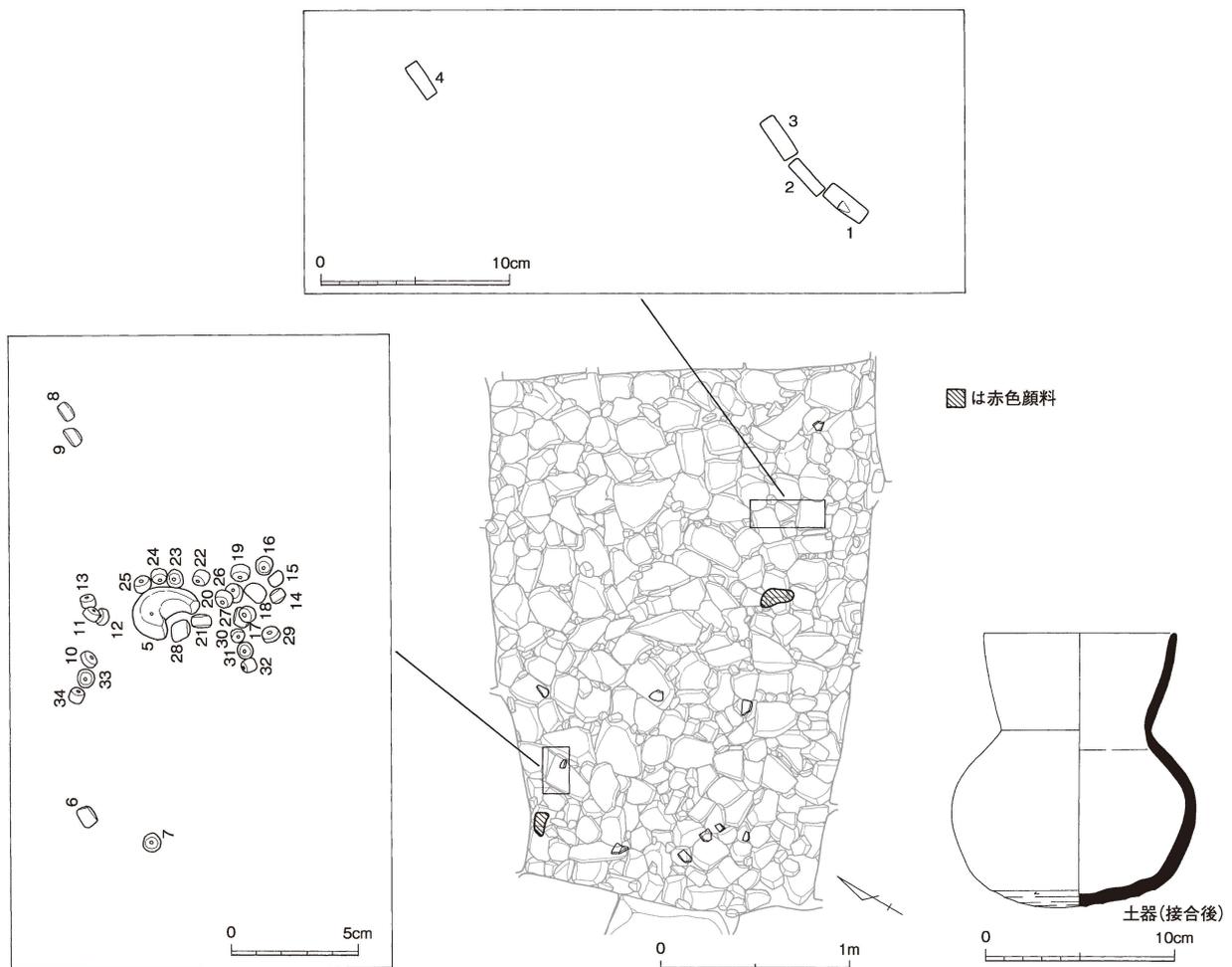


図9 6号墳石室内遺物出土状況 (1/3・1/4・1/40)

4 出土遺物

(1) 石室内出土遺物 (図10・表1)

1～4は碧玉製の管玉である。いずれも片側からの穿孔。1は長さ2.6cm・径0.9cm、2は長さ2.3cm・径0.7cm、3は長さ2.4cm・径0.9cm、4は長さ2.1cm・径0.8cmを測る。5は硬玉製の勾玉。片側からの穿孔。高さ3.2cmを測る。6～34はガラス玉である。番号21と30の資料は、取り上げの途中で破損してしまい、図化を行っていない。詳細については表1にまとめた。35は須恵器広口壺である。口径10.0cm、頸部径8.0cm、器高14.6cmを測る。

36～38は鉄製品である。いずれも床面近くの排土中より出土。36・37は弓金具（両頭金具）か。38は不明製品。

(2) 墳丘出土遺物 (図11)

1～8はトレンチ出土資料、9は表採資料である。1・2はグループ2、3～5はグループ3、8はグループ1に該当する。1～7は須恵器蓋杯である。1・3・6は杯蓋で、体部と天井部との境に沈線を巡らせるものである。1・3は体部を丸く収め、6はわずかに段をなす。1・3は口縁部にそれぞれ1カ所、内側からの打痕が残る。2・4・5・7は杯身である。立ち上がりが短く内傾し、杯部が浅いもの（2・4・5）、立ち上がりは比較的直立し、杯部が深く丸みを帯びるもの（7）に二分できる。6・7は器面白色を呈し、軟質で焼成不良である。8は須恵器甕の胴部片。外器面に平行タタキ、内器面に同心円タタキを施す。9は滑石製の紡錘車。外径4.6cm、高さ2.6cm、孔径0.8cmをそれぞれ測る。

表1 ガラス玉計測値

図番	径		厚さ		孔径		重さ	堆積	比重	色調	性質	備考	
	大	小	大	小	大	小							
1	6	8.98	8.28	6.68	6.43	2.10	1.77	0.791	0.320	2.472	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
2	7	8.09	7.91	6.07		1.78	1.53	0.518	0.204	2.539	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
3	8	7.95	7.55	5.03		1.88		0.470	0.186	2.527	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
4	9	7.93	7.59	5.93		1.46		0.465			青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
5	10	7.70	7.10	5.39		1.96		0.450	0.184	2.446	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
6	11	7.16	6.78	5.29		1.83		0.390	0.160	2.438	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
7	12	7.92	6.98	4.35	4.02	2.27		0.362	0.145	2.497	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
8	13	7.32	7.16	5.10	4.41	2.20		0.394	0.163	2.417	青紺	カリガラス	
9	14	8.85	7.53	6.24	5.68	2.32	1.75	0.615	0.245	2.510	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
10	15	8.25	7.26	5.32		1.86		0.492	0.207	2.377	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
11	16	8.34	7.87	5.30		2.00		0.522	0.207	2.522	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
12	17	7.62	7.44	4.82	4.45	2.03		0.400	0.164	2.439	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
13	18	9.22	8.79	8.54	7.28	2.20	1.83	0.965	0.388	2.487	淡青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
14	19	9.00	7.43	5.91	4.78	2.15		0.569	0.236	2.411	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
15	20	7.43	6.86	6.31	5.96	2.02		0.488	0.197	2.477	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
16	21										淡緑	ソーダ石灰ガラス	破片資料, 高A1
17	22	7.47	7.11	6.59	6.25	1.94		0.521	0.208	2.505	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
18	23	8.28	7.53	5.97		1.83		0.593	0.232	2.556	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
19	24	7.98	7.63	6.42	5.45	2.15		0.518	0.232	2.233	青紺	カリガラス	
20	25	8.65	8.50	5.44	4.84	2.15		0.573	0.225	2.547	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
21	26	8.20	8.02	5.02	4.44	3.10	2.37	0.475	0.187	2.540	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
22	27	10.48	10.27	8.60		3.12	2.27	1.224	0.517	2.368	淡青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
23	28	10.22	9.71	9.19		1.53		1.399	0.570	2.454	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
24	29	8.24	7.81	5.40	4.82	2.78		0.484	0.193	2.501	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
25	30										淡緑	ソーダ石灰ガラス	破片資料, 高A1
26	31	8.88	8.85	6.17	5.35	2.25		0.638	0.258	2.473	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
27	32	8.18	7.00	7.01		1.75		0.607	0.244	2.489	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
28	33	8.18	7.27	6.07	5.57	2.37		0.541	0.217	2.493	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1
29	34	7.93	7.48	6.36		1.78		0.563	0.220	2.559	青紺	ソーダ石灰ガラス	低A1

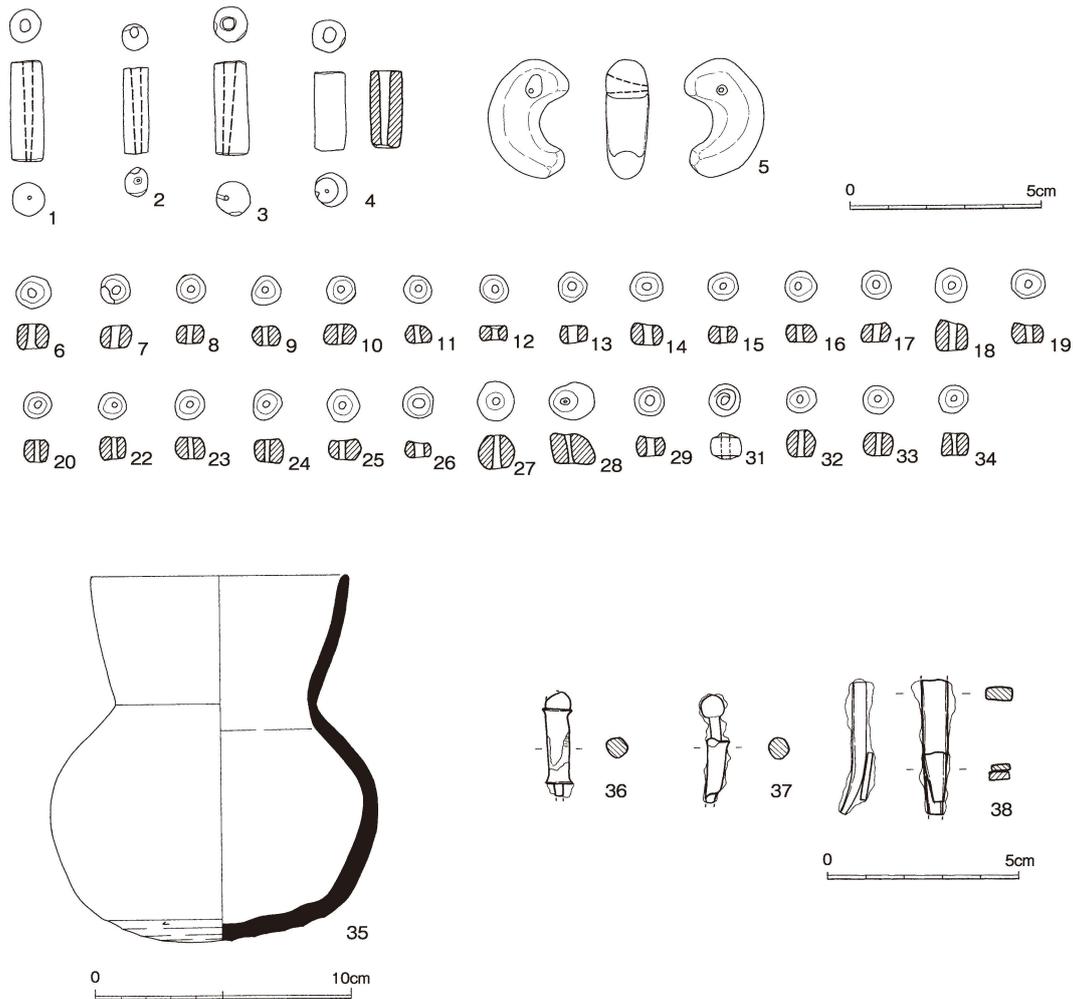


図10 6号墳石室内出土遺物 (1/2・1/3)

(3) 6号墳周溝2出土遺物 (図12)

6号墳出土資料には、完形に近い資料も存在するが、破碎されているものが多い。中でも、須恵器の大甕が細片と化しているなど、その行為は徹底している。周溝中央には巨木があり、完掘するには至っておらず、資料の採集は不十分で復元できなかった資料も多い。また、周溝2は位置的にみて5号墳にも近く、墓道を兼ねている可能性もあり、全ての資料が必ずしも6号墳に伴うとはいえない。図示した資料は全て須恵器である。出土資料全体をみても須恵器が大半を占める。

1～7は蓋杯である。1～6は杯蓋で、i；体部と天井部との境が段をなすもの(1・2)、ii；沈線を巡らすもの(6)、iii；何もなさないもの、の3類がある。i類はいずれも口縁部が段をなしており、ii類は口縁内側の端部付近に沈線を巡らしている。iii類には、「く」字に折れ曲がるもの(4)、丸みを帯びるもの(3)の2者があり、前者は端部がわずかに段をなし、後者は沈線を巡らしている。5・7は杯身である。立ち上がりは内傾し、端部は丸く収めている。8・9は甕、10は短頸壺の口縁部片。11・12は甗である。11は細片を接合、復元したもので、口径10.6cm、頸部径5.4cmを測る(いずれも復元値)。薄くシャープな作りで、刺突文や波状文で外面を飾っている。12はほぼ完形の資料。11に比して長胴化しており、焼成もやや甘い。頸部外面に波状文を施す。口径12.4cm、頸部径6.5cm、器高13.1cmを測る。13は長脚二段三方透かしの無蓋高坏である。これも細片資料を復元している。杯外面には2沈線を有し、その間に刺突文を施す。

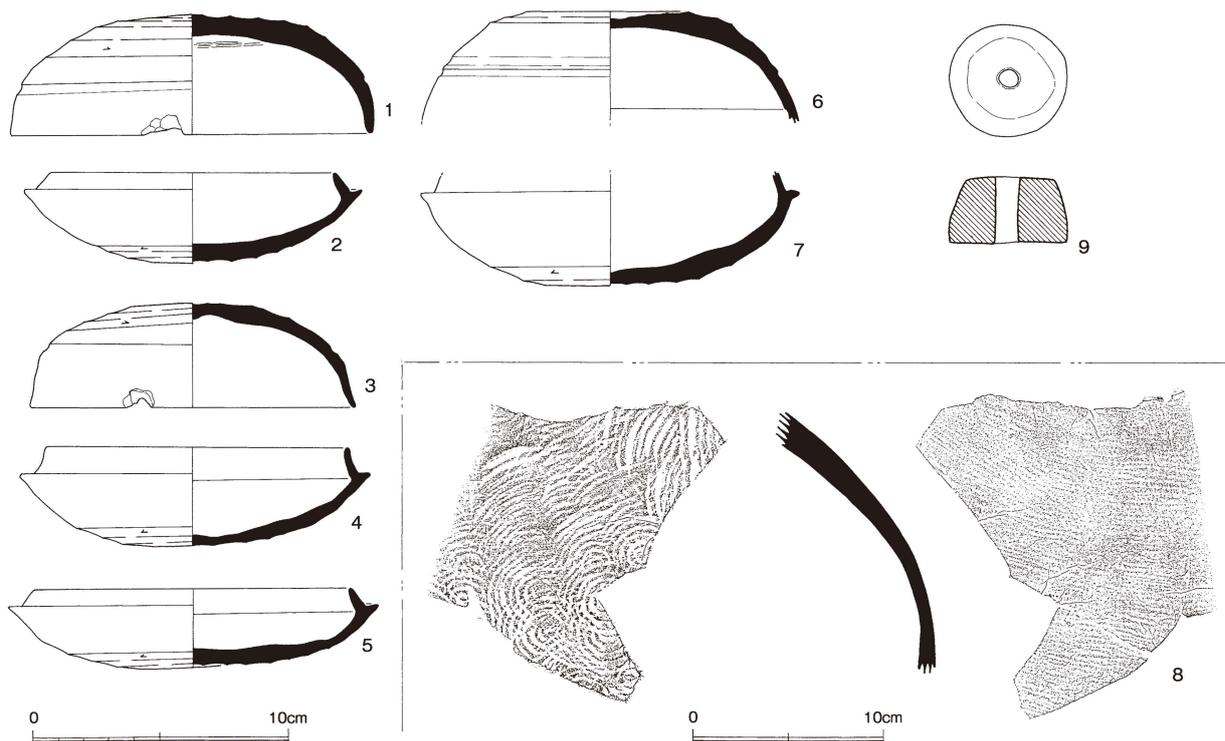


图11 6号墳墳丘出土遺物 (1/3 · 1/4)

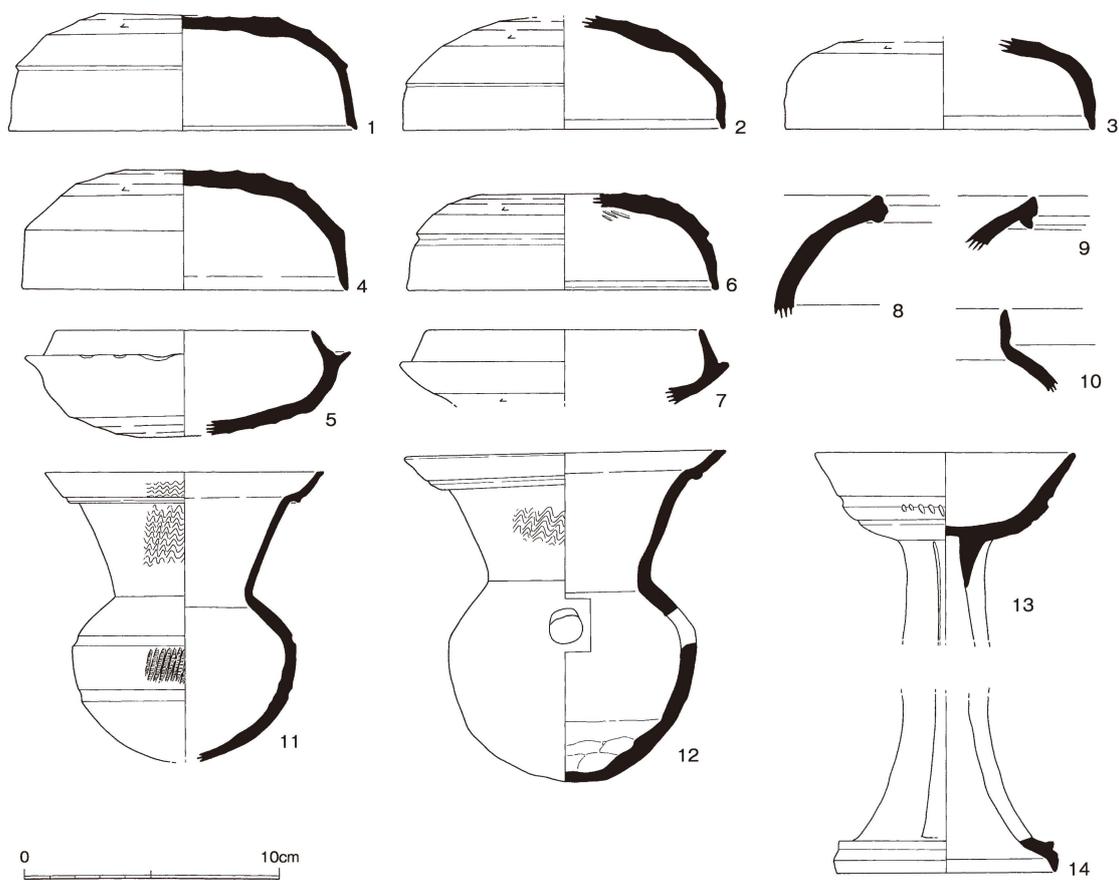


图12 6号墳周溝2出土遺物 (1/3)

Ⅲ 5号墳の調査

1 古墳の現況および立地

5号墳は6号墳と同一の尾根筋上に存在し、北西側に近接して存在する古墳である（図3）。宅地の造成により、墳丘の北側が大きく削り取られており、すでに墳丘の1/2近くを失っていた。加えて古墳の南西側も目前が急峻な崖面となっており、古墳の一部がかろうじて瘦せた丘陵尾根筋上に残っている有様であった。墳丘の中心には陥没孔があり、すでに横穴式石室の天井部が失われていることは明らかであった。加えて、墳丘の高まりも現状で1m前後しかなく、横穴式石室の破壊も相当進んでいることが予想された。

2 墳丘

(1) 現況

周辺樹木の伐採の後、平板測量を行った。等高線は25cm間隔で作成している。先にも述べたように、墳丘の南北側は開発により、すでに失われているが、東西側は比較的良く旧状をとどめていた。墳丘裾部の東西側には造成により造り出した平坦面がわずかに残っており、明確に墳丘端部を窺うことができる。この比較的残りの良い、墳丘東西側にトレンチを設定し、土層を観察した（図13）。石室中心より、A-B断面では5.5m、C-D断面では5.8mの地点に、墳裾と考えられる地山の傾斜変換点を確認できた。これを参考にすれば、墳丘東西方向の径は10.8mであること分かる。

また、古墳の南東側で浅い溝（周溝3）を確認した（図14）。これは一部墳丘周囲を巡り、それから南西方向へと伸びている。この溝からは若干の須恵器甕も出土しており、位置的にみても、一部墓道を兼ねた古墳の周溝に相当するものであると判断した。この溝も考慮すれば、5号墳は径11m程の円墳であるといえるだろう。5号墳においても外表施設は認められない。

(2) 土層

墳丘盛土の状況を調べるため、墳丘東西方向にトレンチ2本を設定した。西側に設定したトレンチの土層をA-B断面、東側に設定したトレンチの土層をC-D断面とし、次に所見を述べる。

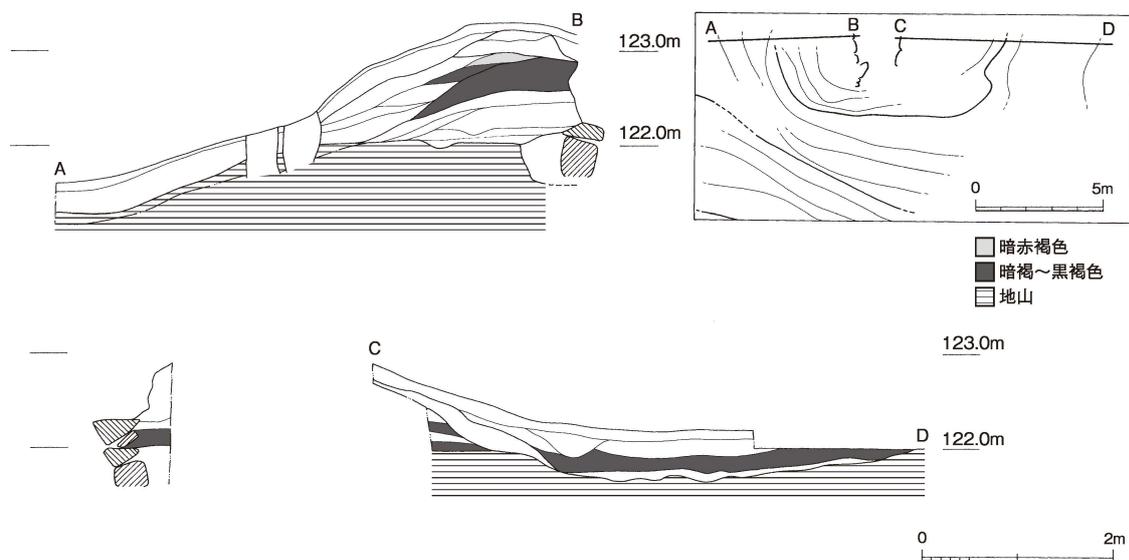


図13 5号墳土層 (1/80)

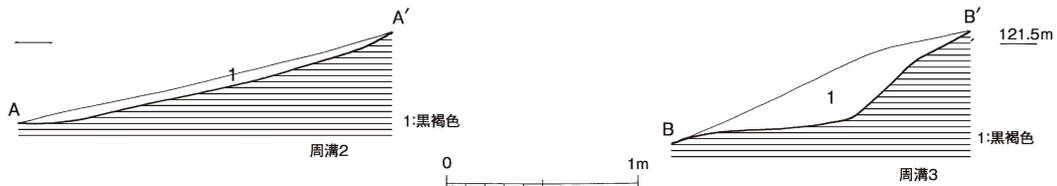


図14 周溝 (1/40)

A - B断面

墳丘裾部及び石室掘方を確認した。標高122.0m付近で地山を平坦に仕上げ、墳丘の裾部や石室墓坑を削りだしている。トレンチ西端より0.7m地点に地山の傾斜変換点があり、ここが墳丘裾部に相当しよう。石室掘方は深さ0.4mで、掘方の上面は玄室基底石の上面の高さに等しい。基底石を据え、石室掘方を充填して固定した後、壁材を積み上げながら地山の平坦部分に盛土を行っている。A層の上面を境に墳丘盛土の変化が認められ、ここに工程上の大きな画期をみることができるだろう。

C - D断面

巨木が存在し、石室墓坑の一部と墳丘裾を確認したのみである。墳裾を確認したトレンチ西端より1mの地点に地山の傾斜変換点があり、ここが墳丘裾部に相当しよう。A - B断面における所見と等しく、標高122.0m付近で地山を平坦に仕上げ、墳丘の裾部を削りだしている。墳裾より東側ではわずかに凹面をなしているが、周溝と呼べるほどの明確な溝状をなしているわけではない。

(3) 出土遺物

図18-1~4は墳丘表採もしくは表土中より出土したものである。1は須恵器杯蓋で、全体的に器壁は厚い。体部と天井部との境は段をなし、口縁端部付近の内面には太い沈線を巡らす。内面天井部には当て具痕が残る。2・4は須恵器杯身である。2は立ち上がりが高く、口縁部はわずかに段をなす。全体的に器壁は薄い。4は口縁部片。立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。3は壺等の頸部片。外器面に波状文を巡らしている。

主体部西側の墳丘盛土中から、須恵器壺が出土した(図4・15)。口頸部が破碎され、つぶれた状態で出土しており、ほぼ完形に復元できた。掘り方を確認するには至らなかったが、出土状況を見る限り、墳丘中に埋置されていたものと考えて良い。なお、周溝出土の遺物(須恵器甕)はいずれも破片で焼成不良のため、軟質で摩耗がひどく、調整も不明瞭なため図化していない。

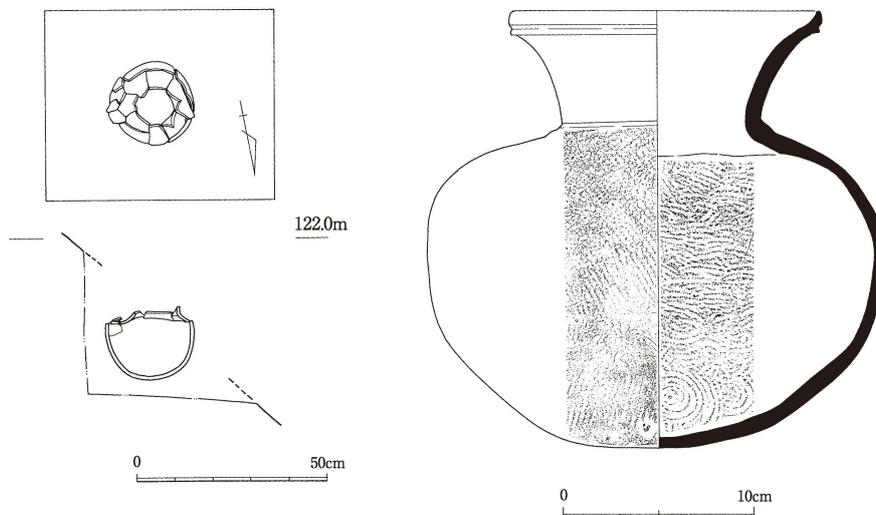


図15 5号墳墳丘遺物出土状況 (1/4・1/20)

図15-1が出土した須恵器壺である。口縁端部は上方にはね上がり、その下面には強い沈線により突帯を作り出している。口径16.1cm、器高23.2cm、頸部径10.6cmを測る。胴部外器面は擬格子状の平行タタキ、内器面には同心円タタキ（青海波状）を施す。

3 主体部

(1) 横穴式石室

5号墳の主体部は横穴式石室である（図16）。石材の多くは花崗岩で、開口方向は南西（S-35° -W）である。石室北側、つまり奥壁側はすでに削り取られており、遺存部分も天井部および壁体の半ば以上を失っている。6号墳主体部と同じく、石室の形態は単室無羨道石室で、入口には「ハ」字に開く前庭部が付く。

玄室は、幅1.4~1.8mを測り、長さは1.2m程まで確認している。基底部には大形の石材を配し、その上には塊石を積み上げているようだ。攪乱により床面の一部にのみ敷石が残るが、本来は全面に敷き詰めてあったのだろう。玄門・前庭部では左袖側のみが残る。玄門部には敷居石を配し、やや扁平な柱状石を立てて袖石となしている。袖部は突出せず、袖石の外面はそのまま前庭部側壁へとつながりに続く。現状において、前庭部の石積は袖石より40cm程しかのびていない。墓道は地山を掘りくぼめたもので、玄門部より1m程続いた後、わずかに立ち上がりをみせる。

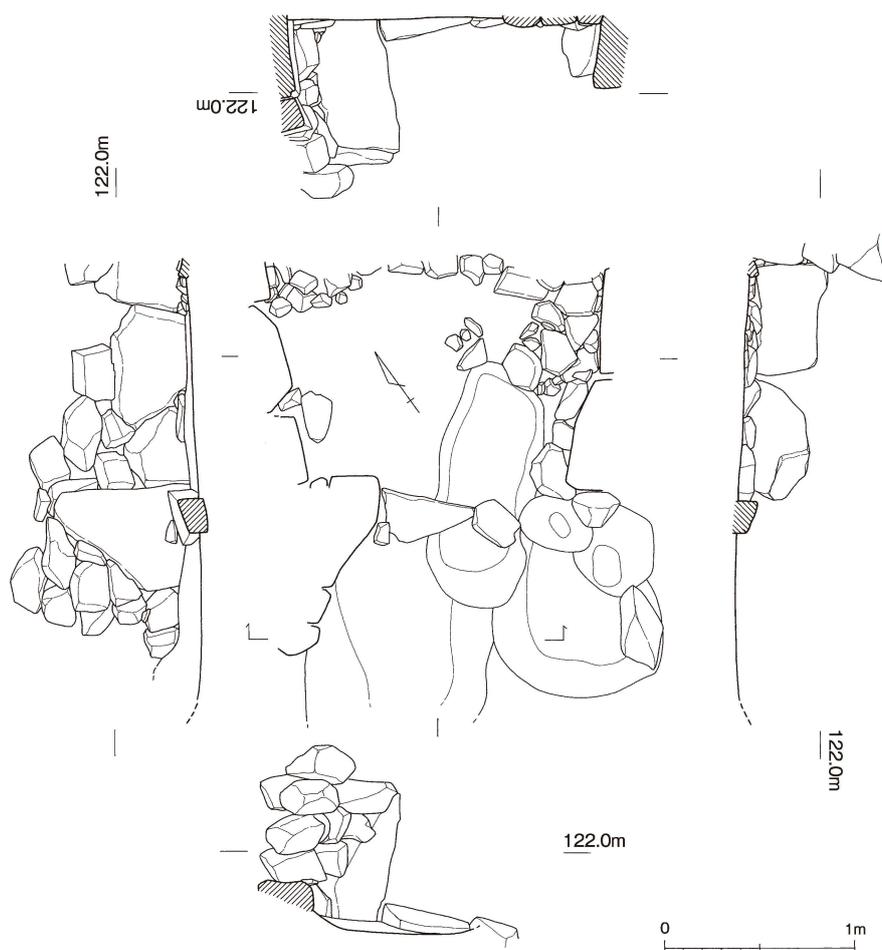


図16 5号墳主体部 (1/40)

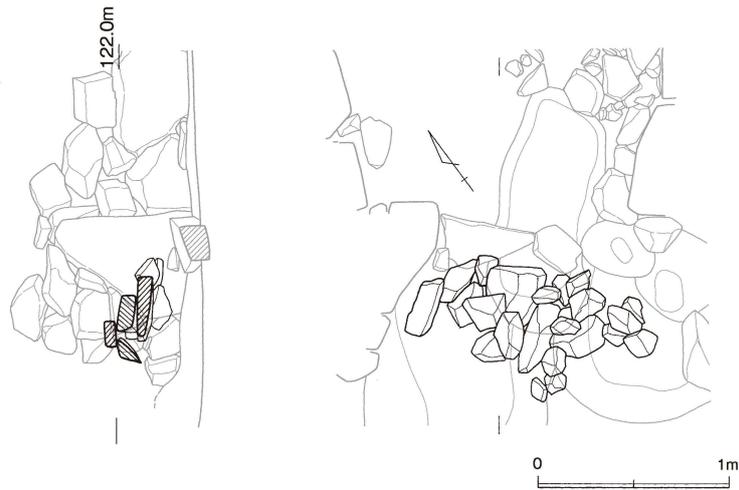


図17 閉塞 (1/40)

(2) 閉塞

5号墳主体部においても、閉塞石を確認することができた、それは、玄門部にやや扁平な石材を積み上げたもので、積石の厚さは20~30cm程しか残っていない。石の広がりほぼ前庭部内にとどまっている。ただ、この積石は前庭部底面から20~30cm浮いた位置にあり、これが初葬時からの閉塞であるとするには疑問が残る。

(3) 出土遺物 (図18-5)

玄室床面の左側壁際から鉄鏃が1点出土した。腸挟三角形式の身部を持ち、残存長6.0cmを測る。

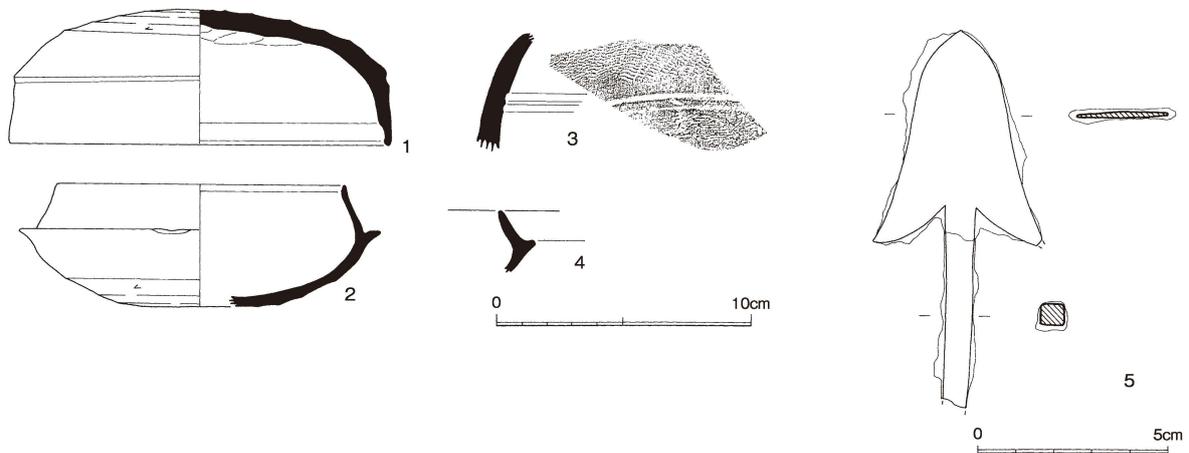


図18 5号墳出土遺物 (1/2・1/3)

おわりに

これまでの調査成果と問題点を列記し、まとめに替えたい。

七曲古墳群について

先に述べたように、今回の踏査で新たに2基の存在を確認し、七曲古墳群は、計8基の古墳群となった。その立地をみると、丘陵斜面部分に存在する8号墳を除けば、いずれも丘陵の高所や尾根筋に分布していることが分かる。

限られた情報の中での推察となるが、今回調査した2基の古墳や7号墳の所見を考え合わせ、担当者は七曲古墳群が主として6世紀中頃（TK10型式期）の古墳により構成された古墳群であると考えている。そして、しばらく期間をおいた後、7世紀（TK209型式期以降）になって丘陵斜面部に古墳の築造が再開（8号墳）されたのではないだろうか。月隈丘陵の一带は、福岡市域でも有数の古墳集中地域であり、各古墳群の時期的把握は、その歴史的意義を解明するにも必要不可欠なことである。今後の調査・研究の進展に期待したい。

古墳の時期について

5号墳、6号墳とも、出土遺物において古式のものは、おおむねMT15型式期～TK10（古）型式期に位置づけることができる。これら古墳の築造年代も6世紀前葉から中頃を考えることができるだろう。次に5号墳、6号墳の先後関係について検討する。5号墳と6号墳の主体部は平面形態がほぼ等しく、構造的にみても共通点の多いものであるが、5号墳石室の袖部形態などは6号墳石室のそれに後出するものといえる。加えて、6号墳と5号墳は立地の面からみても、密接な関係が窺えることはすでに述べたが、6号墳（18m）と5号墳（11m）という、墳丘規模の差から考えても、5号墳は6号墳に後出する古墳であると考えられる。したがって、ここでは、6号墳をTK10（古）もしくはMT15型式期、5号墳をTK10（古）型式に位置づけておくことにしたい。

6号墳石室の使用状況について

墓道部分における土層の所見から、6号墳主体部である横穴式石室は「最後」の使用の後、墓道は完全に埋め戻され、更に盛土を行って、その痕跡まで消された可能性を述べた。石室内出土の遺物は限られており、時期を知ることのできる遺物は広口壺（図10-35）のみである。この資料は、古墳の築造時期とさほど大差のない、TK10型式期の範疇に収めて良い資料ではないかと考えている。前述したように、墓道部分では明確な追葬の痕跡を確認することはできなかった。石室内には少なくとも2体の埋葬があり、一度は追葬行為が行われた可能性は高い。しかし、これら事実から、担当者は横穴式石室の使用期間は意外と短かったのではないかと考えている。加えて、石室内の副葬品の量も少なく、追葬の後、速やかに石室を封鎖したのかもしれない。

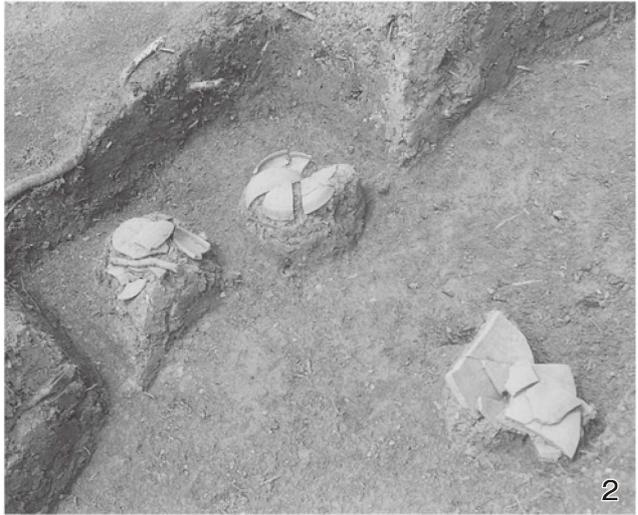
また、副葬品に鉄製武器がほとんどみあたらないことは注意すべきかもしれない。弓金具が出土しており、不明鉄器が武器である可能性もあるので、武器が全く存在しない訳ではないが、あれだけ攪乱を受け、玄室の1/2弱しか調査をおこなっていない5号墳石室からでも、鉄鏃は出土している。この事実は、6号墳被葬者の性格を考える上でも、示唆的であるといえるだろう。また墳丘中からではあるが、6号墳からは紡錘車も出土している。



1 遠景 (南から)
3 近景 (北西から)
5 6号墳墳丘 (西から)

2 6号墳遠景 (南東から)
4 5・6号墳墳丘 (北西から)
6 周溝2 (南から)

図版 2



1 6号墳墳丘（南から）
3 5号墳墳丘（西から）
5 5・6号墳墳裾（南から）

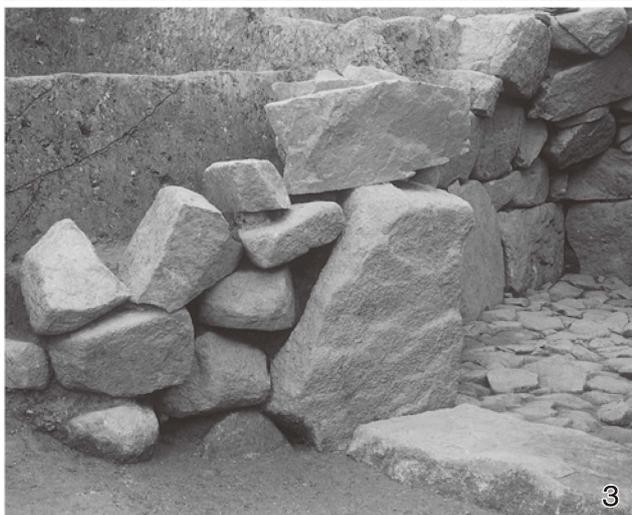
2 6号墳墳丘遺物出土状況（南東から）
4 5号墳墳丘遺物出土状況（南西から）
6 5号墳周溝（南から）



1 6号墳主体部閉塞1 (南西から)
3 6号墳主体部閉塞3 (西から)
5 6号墳主体部閉塞5 (北東から)

2 6号墳主体部閉塞2 (南から)
4 6号墳主体部閉塞4 (西から)
6 6号墳主体部閉塞6 (北から)

図版 4



1 6号墳主体部俯瞰（南西から）
3 6号墳左前庭部側壁（南から）
5 6号墳玄室奥壁（南西から）

2 6号墳石室入口（南西から）
4 6号墳右前庭部側壁（西から）
6 6号墳玄室入口（北東から）



1 6号墳玄室奥壁左隅（南から）

3 6号墳玄室右側壁（北東から）

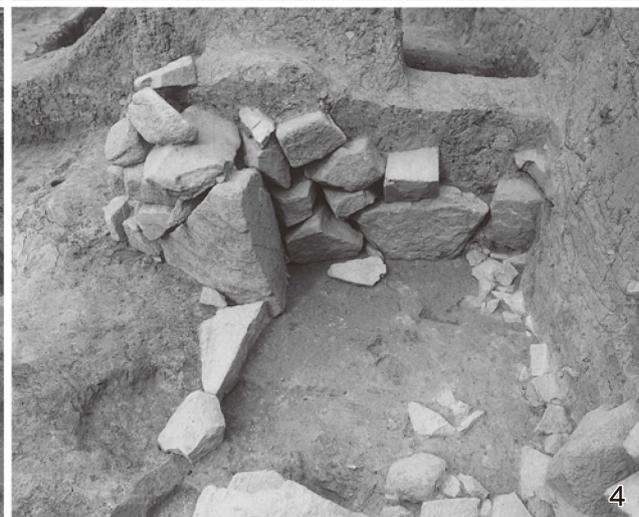
5 6号墳玄室内遺物出土状況（南東から）

2 6号墳玄室奥壁右隅（西から）

4 6号墳玄室左袖部（西から）

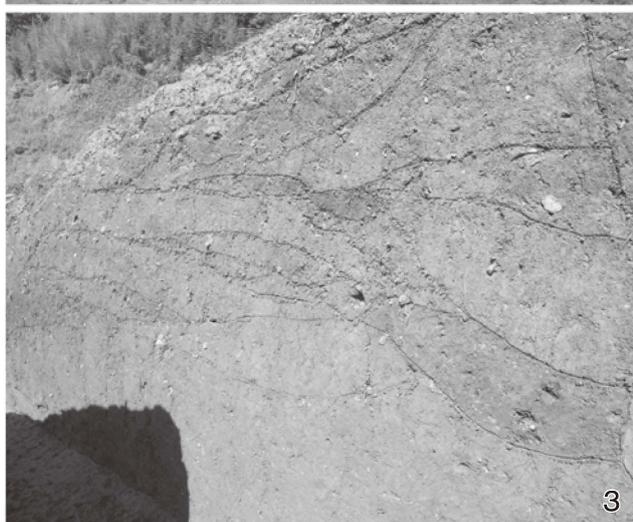
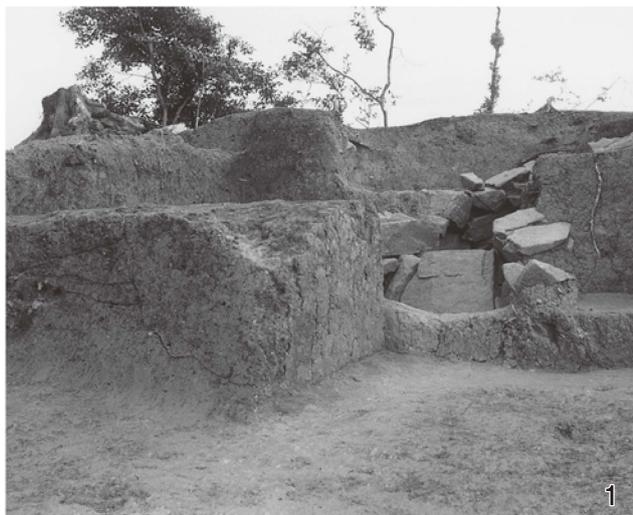
6 6号墳玄室床面（北東から）

図版 6



1 5号墳石室左袖部（東から）
3 5号墳前庭部左側壁（南から）
5 5号墳閉塞（南西から）

2 5号墳石室全景（北東から）
4 5号墳玄室左側壁（東から）
6 5号墳閉塞（北東から）



1 6号墳墓道断面（南から）

3 6号墳墓道上墳丘断面（北東から）

5 6号墳墳丘断面（南から）

2 6号墳墓道（南西から）

4 6号墳墳丘断面1（南西から）

6 6号墳地山面被熱痕跡（南東から）

图版 8



图 10-35



图 11-1

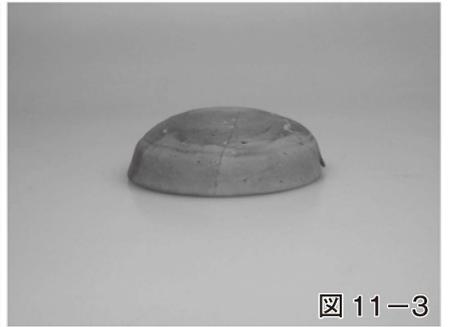


图 11-3



图 11-4



图 12-1



图 12-4



图 12-5



图 12-6



图 12-12



图 15



图 18-1



图 18-5

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ななまがりこふんぐん							
書名	七曲古墳群							
副書名	5・6号墳の調査							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1161集							
編著者名	藏富士 寛							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ななまがりこふんぐん 七曲古墳群	ふくおかけんふくおかしはか 福岡県福岡市博 たくとおあざりゆうげじ 多区大字立花寺 あざしらいし 字白石28番	40130	20044	33° 34' 1"	130° 28' 40"	20100809～ 20101028	420㎡	防災工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
七曲古墳群	墳墓	古墳	古墳2基	須恵器, 鉄器, 玉類				
要約	<p>今回は5・6号墳の調査をおこなった。6号墳は20m近い大形の円墳であり、周辺地域における群集墳の動向を考える上でも重要な古墳である。2基の古墳に大きな時期差はないが、墳丘規模や石室構造をみれば、築造順序は6号墳→5号墳となるだろう。いずれの横穴式石室も5世紀代の初期横穴式石室から6世紀代における単室構造の有羨道横穴式石室へと向かう過渡期にあたる貴重な資料である。</p> <p>なお、今回の調査に伴い、周辺の踏査を行ったところ、新たに2基の古墳の存在を確認した。今後更なる周辺地域の精査が必要となるだろう</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1161集

七曲古墳群

— 5・6号墳の調査 —

2012年（平成24年）3月16日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社白木印刷

福岡市南区若久1丁目2-30